
日常のヒトコマ

空月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常のヒトコマ

【Nコード】

N6611Y

【作者名】

空月

【あらすじ】

あいつは自他とも認めるくらい顔がよくて金持ちだから当然のように女は途切れないわけで、更に言えばそのせいで面倒をこうむったことは多々ある。それでも縁を切らないのは、結局のところどうでもいい会話がだらだらできるくらいの悪友ポジションが気に入っていたからなわけで——それなのにあんな発言をされるのは予想外もいいところだった。っていうか正気を疑う。……あいつらしいとも思っけど。

顔良し頭良し金持ちの男と口が悪くて発言に遠慮のない女が悪友から恋人未満にクラスチェンジする話のようなそうじゃないような「とある夏の〜」以外は悪友時代の過去話。一応完結済にしていますが、気が向いたら増えるかも。 自サイトからの転載です。

とある夏の午後のこと

あいつは、暇で暇で仕方がなくなつたときを見計らつたかのようにやって来る。

「よお」

「何の用」

「うっわ冷たいオコトバ。理由なんてねーよ。なんとなくだ」

「うざい。人口密度が高くなって暑いから帰って」

「クーラーでも入れろ。てか一人も二人も変わるかよ」

「電気代が高くなるからやだ。暑くなるっての心情的に。とにかく帰れ」

「どうせ暇だろうが。ついでに俺手土産持参だぞ。しかもアイス。偉いだろ」

「……食べ終わるまでならOK」

「それ酷くねえ？まーいや。んじゃあがるぞ」

無駄な会話のせいでちょっと溶けかけたアイスを二人で食べる。

「これどこで買ってきた？」

「そこらへんのコンビニ」

「あっそ。なんでこんなに買ってくるわけ」

「だって暑いだろーが」

「限度って言葉を習ってこい」

「知ってるからいい。お、新商品発見」

「買ってきた本人が覚えてないってどうなの」

「手当たり次第に取ってきたからな」

「金がある奴はいいですねー、何も考えずに買い物できて」

「お前と違ってな。うらやましーだろ」

「あーハイハイ羨ましいですとも。こちとらただの貧乏学生ですから」

心の中で盛大に罵りながら、残りのアイスを冷凍庫に納めた。

「もう食わねーの？」

「夜に食べる。……なに、まだ食べる気？」

「いやいい。つーかこの部屋暑い。よく生活できるな」

「夏中クーラーかけっぱなしのアンタの部屋と比べればそりゃ暑いだろーね」

「文明の利器があんだから使やいいのに」

「さっきも言った。電気代が高くなる」

「一日くらいいいーだろ？ それともそんなに貧乏だったか？」

「これくらい我慢できるし。この部屋の暑さに文句あるならさっさと帰りなよ」

「外のが暑いからお断り。涼しくなったら帰る」

「うわ迷惑。言っとくけどお茶も菓子も出ないから」

「最初から期待してねーよ。アイスあるし」

「そーですか。とりあえず退け。邪魔」

フローリングに寝転んだあいつを軽く蹴る。ふざけて『ぐえ』とかうめいたが無視だ。

「床冷たくて気持ちいいんだよ」

「だったら床と結婚しろ」

「それは勘弁。つまんねーし」

「つまるつまらんの問題なわけ？　それは」

「俺にとっては」

「ならお笑い芸人とでも結婚しろ。もしくは変人」

「それもお断りー。俺お前としか結婚したくないしな」

一瞬何を言われたか分からなかった。

「でもまだ結婚はイヤだな。色々面倒だし。籍だけ入れるにしても、夫婦ってなるとなんか若々しさが足りない気が」

「ちょっと待つて。何言ってるか理解できないんだけど」

「俺の結婚のイメージを語ってる」

「それも含めてその前になんか変なこと言わなかった？」

「変なこと？　俺がお前としか結婚したくないって言ったことか？」

「……そうそれ。なんでそうなるわけ」

「だってお前といると楽し。っーか他の女みたいにうざくないし」

「アンタを好きな子たちに聞かせてやりたい。その科白」

「それはそれとしてだな。今すぐ結婚しろって言ってるわけじゃねえんだしよ。ま、候補ぐらいに思っとけ」

「それプロポーズ？ ……あーもう意味わかんない。ていうか結婚したくないし」

「きつつー。俺恋人としても旦那としても最高だと思っただけどな炊事洗濯家事全般出来るし金持ちだしついでに浮気OKだぜ？」

「そついう問題じゃない。それ以前に浮気OKでどうなの」

「束縛しねーって言ってんだよ。あ、もしかしてお前束縛されたい派？ ならするけど」

「だから、今まで恋愛対象に見てなかった奴にいきなり結婚とか言われても」

「今から考えろよ。俺気イ長いから待ってやる」

「無茶言つな。……はあ。とりあえずからかっけるとかじゃないわけね」

「冗談でこんなこと言うか。それもお前相手に」

「そりゃそうだけど。……アンタいつとも突拍子もないことしか言わない気がする」

「柔軟な思考を持て。頭固いと将来苦勞するぜ？」

「なんか違うつしょそれは。てかさつさと帰れ。もう夕方だったの」

「めんどい。夕飯作ってやつからもうちよい居させる」

「じゃあなんかイタリア系のやつ」

「りょーかい」

突飛な言動も結局夜まで居座るのも、言ってみればいつものこと。そんなあいつとの夏の午後。

B i r t h d a y

ふと目に入ったカレンダーで今日の日付を確認して、「あ」と一人呟く。

「今日って誕生日だったっけ……」

もつと前、こんなにひねくれた性格になる前は、誕生日と言えば一年の一大イベントで一週間以上前からそわそわして友達から誕生日プレゼントをもらえるだろうかなんて可愛らしい心配（むしろガメつか？）をして。とにかく当日になってやっと自分の誕生日だったと気付くなんてことはなかった。

親元に居ればまた違うのだろうが、生憎と今は一人暮らしだ。自分で自分の誕生日のために料理作ったりするなんて嬉しくも何ともないというかはつきり言えば面倒だ。

「あー……。自分で自分に誕生日プレゼントってのも何だかな……」

料理を作るのが面倒なら奮発してどこかに食べに行くとか、せめて何か誕生日プレゼントとして買うとか考えてみるものの、自分で自分にやるのではなんだか味気ない。わざわざ誕生日だからってそんなことをしなくても、気が向いたときにやるほうが数倍いい。

そう思い、まあいいやと考えることを放棄した。

——ピンポーン。

少々音の悪くなった呼び鈴が鳴る。誰だろうと一瞬考えて、こんな微妙な時間に来るなんて一人しかいないな、と思い直した。

外は暗闇、時計の短針は文字盤の2を指している。すなわち午前2時。まず常識のある人間なら来訪などしない。

——ピンポンピンポーン。

じれったそうに何度も鳴る呼び鈴に意識を傾けつつ、動く気がしないので放っておく。

しばらく呼び鈴が鳴っていたが二十回を過ぎたあたりで止んだ。

その数秒後にテーブルの上の携帯が震えだした。

ソファに寝転びながら手を伸ばして震えるそれを掴む。ディスプレイには予想通りの名前が表示されている。

無造作に通話ボタンを押して耳に当てれば、うんざりするほど聞きなれた声が機械処理で少しだけ違う風に聞こえてきた。

『居留守使つなよ。メンドくさがってないで早く開ける。不審人物だと思われるだろうが』

「アンタって常識ないわけ？ 今何時だと思ってんの。真夜中、つまり二十四時間営業の店しか開いてないような時間だってわかってる？ ていうかアンタは立派な不審人物だつての。いっそ警察に捕まって世間の荒波にもまれて来い」

『お前起きてっだろ。なら店が開いてなかつたが真夜中だろうが俺の目的は達成できる。……っーか早く開ける』

「……………」

思いつきり無言で返して、仕方なく玄関の鍵を外しに向かう。あいつならピッキングとかやりかねない。

——ガチャ。

「遅え」

「偉そうに言うな。開けてやっただけありがたいと思え」

「冷てえの。せつかく一人寂しいバースデーだろうと思って祝いに来てやったのに」

意外なような予想がついてたようなそんな言葉を吐いてあいつはズスカと部屋に上がりこんだ。

「一人寂しいバースデーだから何だって訳でもないし。……で、どうしてこんな時間なわけ」

いくらなんでも非常識すぎる。せめて朝だろう。もしくは夕方。

「あ？ 別に何時だろうが問題はないだろ。それともなにか？ お

前はきつちり自分が生まれた時間じゃないと祝わないとかそういう奴なわけ？」

「そういう意味じゃない。祝うにしたって真夜中である必要はないだろうって言うてんの」

「思い立ったら即実行だろ。ちょっと店寄ったせいで遅れたんだよ」

ホントは日付変わる前に来ようと思ってたんだけどな、と「そこまでやらなくても」と思うような科白を呟いて、あいつは持ってきた袋から色々なものを取り出した。

「お前外で食うのあんまり好きじゃねえから、作ってやろうかと思つてな。言つとくが並みのシェフより美味いもん作る自信はあるぞ」

今更言われなくなつてこいつの料理の腕が一流レストラン並みだつてことぐらいは知っている。しかも好みを知っている分アレンジを加えて食べやすくしてくれるため、一流レストランよりも良いと言える。

「作ってくれるってんなら喜んで食べさせてもらうけど。今日用事はないの？」

新しい彼女ができたって聞いたからしばらくはこつこつこともないと思つていたのだが。

「いちいち俺の行動に干渉してくるから振った。今は恋人ナシ」

「今回は短かったわけね。……一週間ちよいつてとこか」

「メール打ってるだけで誰宛かしつこく聞いてくるんだぜ？ ウザ過ぎ」

「恋する女の子はそういうもんだと思うけど。ていうかい加減とつかえひつかえやめれば？」

「恋人がいなくてうじゃうじゃ集まってくるんだよ。しばらくでも遠ざけとかないとこっちが参る」

顔よし頭よしついでに金持ちともなれば仕方のないことではあるが、大変そうではある。

心の中で少し同情しつつ顔には出さずに質問を投げた。

「で、これから作るわけじゃないでしょそれ。つか夜にしかそんなの食べないし」

「まあそうだな。とりあえず……」

「ごそごそとまた別の袋を探るのを見て、何を探してるかは大体想像がついた。」

「ハッピーバースデー。お前確か時計欲しいとか言ってたろ」

言葉とともに差し出された小ぶりの包み。なんとなくいやな予感がしながらも開けてみると。

「……げっ」

「げってなんだげって」

「……もうちょっと扱いやすいのにしてくればよかったのに」

開けた包みの中身は案の定時計だった。しかしブランド物。

「一応安めにしたんだけどな」

「有名ブランド物の時計とか普通つけようとか思わないっての。高いのだと氣イ使うし」

いまいち相場は知らないけれどほいほい庶民が買える物ではないだろう。

「まー気にすんな。プレゼントなんだしよ。お前の好きそーなのを選んで来たんだから」

もう一度時計を眺める。確かに趣味にはあっている。

「……うん、デザインいいしね。ありがとう。大事にする」

結局二人で無駄話して、空が白んできた頃に寝て。

昼に起きてからあいつがご飯作って、それを二人で食べた。

「夜はもっとスゲーもんつくってやつから楽しみに待ってるよ」

「ハイハイ楽しみにしとくよ」

誕生日に恋人と過ごすのが定番なんだろうけど。

悪友と過ごすのだって負けないくらいいいものだと思った。

St Valentines Day

バレンタイン。

とりあえず日本では女性から男性に愛を込めてチョコレートを贈る日。

最近ではお歳暮と大差無くなってはいるけれど、まあ好きな人に告白するいいチャンスだったり、恋人同士のイベントだったりする。

「はよ」

「ああおはよ。……あれ、何その紙袋」

「今日何の日か覚えてるか？」

「今日……ああ、バレンチノ司教の殉教日」

「素直にバレンタインって言えよ」

「朝からチョコレート攻撃か。大変だね」

「俺の科白はスルーかコラ。……… たく俺甘いもんそんなに好きじゃないってのに」

「こついつ機会でもない話し掛けられない女の子はいるんじゃない、きつと。迷惑な話ではあるけど」

「断つても押し付けるんだもんね。……ホント迷惑もいいところだぜ」

そう言うレンの手には大きな紙袋。中にはカラフルな包装の小包。女の子たちの気持ちの詰まったチョコレートやらクッキーやらだ。

「毎年処理どうしてるわけ？」

「一応食つよ。賞味期限とかやばそうな手作りものは流石に捨てることもあるけど」

「渡した女の子がそれ知ったらショックで寝込みそうね」

「仕方ねえだろ。あんな量一人で食えるか。つか食ってやろうとするだけマシだと思ってもらいたいね」

「そりゃオツカレサマ。そして今年も頑張れ」

「くっそ、他人事だと思つて軽く言いやがって……。つか彼女いんのなんで渡してくるんだよ。女除けの意味ねえだろ」

女除けに適当に彼女作ってるアンタは相当酷い奴だよね、と思いながらも口には出さない。確かに彼女が居たほうが寄ってくる女は減るのだ。

……まあ、とっかえひっかえするせいで、そういうのを気にしない女たちが寄ってくるようになってしまっているのだが。

「彼女からも貰うんでしょ？　また拗れるんじゃない？」

「あーいや、昨日別れた。ほら、俺時々お前ん家行くだろ。それたまたま見たらしくて、お前と二股かけてるんじゃないかとか言い出してよ。違うつて言ってるのに、だったらお前ん家行くの止めろとか言い出したから、振った」

「やめれば？　ていうか彼女もちで別の女の家に行く方がおかしいんでしょ。普通しないよ」

「なんで止めなきゃいけないんだよ。別にやましいことしてるわけでもねえのに」

「やましいこととしててもなくても、家にあがるってのは誤解を招くんだよ。二股とかアンタならやりかねないし」

「何気にヒデエなお前……。いつそお前を恋人だー、とか言ったほうが早いんじゃないか？　なんか大概の女は俺とお前が付き合ってる」と勘違いしてるみたいだし」

「お断り。アンタを恋人にするなんて正気の沙汰じゃないし。ていうか恋愛対象に見れないっての。どれだけアンタが女をとつかえひつかえするの見たと思ってんの」

「失礼な。俺の恋人になりたいって奴がどんだけいると思ってんだよ」

「その人たちにしとけ。せつかくアンタの女癖を知りながらそれでも好意を持ってくれるなんてスバラシイ人たちなんだから」

「いや、あれは違うだろ。俺に勝手な幻想抱いてるかなんか流行のブランド物みたいに思ってるか、もしくは財布代わりだろ」

「そこまでわかっててなんでとつかえひつかえやめないのか不思議だわ。アンタ頭おかしいんじゃない？」

「俺が付き合う気ないって言ってるのに寄ってくる女どもが尽きねえからだよ。わかってんだろが」

「……ま、仕方ないか。とりあえずガンバレ」

そう言っただけでレンが来るまで読んでいた本に視線を戻す。初めて買った作家なのだが、結構面白い。と、頭にコッソリと何かがぶつけられた。

「……何。今本読んでるんだけど」

「コレ。やるよ」

渡されたのは、ちょっと大きな目の包みだった。

「何これ。どういづつも」

「日頃のカンシャの気持ちを込めて」

「アンタに感謝とか言う謙虚な心があったとは驚き。ていうかなんで今日なの」

「なんか外国では男から送るものだったような」

「変な誤解招きそうだけどね。ま、ありがたく貰つとく。でも何にも用意してないけど」

「別に気にすんな。なんとなくやりたくなっただけだから」

「じゃあホワイต์デーにでもなんか返すべき？」

「いつでもいい。つーか返されると堂々巡りになるから返すな」

「そういうわけにもいかないんだけどね。気にするじゃん」

「だから気にすんなって。……いいから早く開けるよ」

「はいはい」

急かされて、開いた包みの中身は、綺麗なワイングラスだった。

「……しかもペアかよ」

「今度家行ったらそれでなんか飲ませろ」

「うちワイン無いけど」

「俺が持つてく」

「ていうかなんでワイングラス」

「俺が飲みたいから」

「この我俣大王が」

「いいだろ別に。金出すの俺なんだから」

はあ、とひとつ溜息をついて、ワイングラスを包みなおした。

「あ、今日行つていい？」

「駄目っていつでもアンタ来るじゃない」

「お前が来てくれてもいいけど」

「夜ご飯作ってくれるなら」

「よっしゃ、交渉成立。材料は持つてくからな」

「ハイハイハイ。わかりましたよー」

「嫌そうにすんなよ。美味いもんつくつてやつから」

「そついう問題じゃない」

「じゃあどついつ問題だよ」

言っただって理解できやしないので、もう一度溜息をついてまた読書に没頭した。

自分の行動が勘違いを生み出す元になっているとこいつは自覚できているのだろうか。

「丁度いい狭さだから落ち着く」というなんともふざけた理由で、毎度入り浸られるこっちの身にもなって欲しいものだ。

とりあえず余計な波風を立てないためにも今日一日こいつから離れておこうと心に決めながら、鞆に入れたワイングラスを思った。

St Valentines Day ~ night ~

「あがるぞ」

「お邪魔します、とか言えないわけ」

「邪魔すると思っ てんならあがんねえだろ」

「……。靴はそろえなよね」

「ハイハイ仰せのままに」

ふざけてそんな言葉を吐きながら、レンが部屋に上がりこむ。なんだかんだ言っ て慣れてしまっ ている自分が怖い。な

「で、何作っ てくれるの」

「あー……。今日寒いから野菜のスープ。具たっぷりのとろとろで、あとはグラタンかなんか」

「手伝わなくていい？」

「俺が晩飯作るっ て条件で来たんだから手伝うなよ」

「いやそうだけど」

「いいから本でも読んどけ。手伝うなら片付けの時な」

「じゃ、食器の片付けはやるから他よろしく」

「言われなくても」

そこまで言葉を交わして、レンは台所に、自分はリビングに向かう。

置きっ放しになっていたハードカバーの本を手にとって眺め、さして興味をそそれずに本棚に戻しに行った。直すついでに他の本を物色するが、どれも内容を容易に思い出せてしまったので読まないことにする。

台所からはリズミカルな包丁の音が聞こえ始めた。大方スープの具を切っているのだろう。

所在無いので滅多につけない（というかつけても見ない）テレビのスイッチを入れる。バレンタイン特集だとか何とか銘打って、音楽番組をやっていた。

つまらないのでチャンネルを回すが、どれもこれも似たようなものでうんざりする。

「バレンタインね……」

ぼそりと意味もなく呟き、リモコンでテレビを消した。それと同時に台所からレンが姿を現す。手には深鍋。

「これより深い鍋ってねえの？」

「ない。アンタみたいに無駄に調理器具持ってるわけないし。それで十分だし」

「スープは多めに作って次の日リゾットにするとかあるだろうが。これじゃ少なえだろ」

「一人分ならそれくらいだつての。アンタの分があるから足りなく思っんでしょ」

「まったく、気のきかねえやつだな。俺の分も見越して鍋買えよ」

「誰がアンタの分まで考えるか。この自己中男が。ていうかそれ買ったときアンタ家に来ること無かつたし」

「そつすか。……ちつ、仕方ねーな。とりあえずこれでやるか」

「早くして欲しいんだけど」

「うっせえよ。黙って待ってろ」

言ってすぐ台所へと姿を消す。待っているだけというのは存外暇なものなんだな、と思いながら視線をめぐらせて、レンが持つて来たらしい荷物に目を止めた。家に置いてこなかったらしく色とりどりのラッピングの可愛い包みが覗いている。

迷惑だいいながらも一応は受け取るのはいいところなのだけれど、如何せん地を知りすぎているこちらからすると何であんな男に皆が夢中になるのか分らない。

知らぬが仏、みたいなものだろうか……などと考えているうちに

睡魔が寄ってきて、寝心地のいいソファにもたれて目を閉じた。

「こら、起きろよ」

「……んー……」

「人が飯作って持ってきてやったのにソファで熟睡してるとかアリかよ」

「……アリですよ……」

「寝ぼけんな。おら、スープ冷めるだろうが」

「冷めても美味しいスープなのです……」

「わけわからねえこと言っただけで起きろ」

呆れたような声と共に、誰かの手が頬に伸びる気配。嫌になるほど聞いているはずの声に、あれ誰だっけなんて考えた。少し筋張った手が頬に触れる。そして――

「いい加減起きろよ」

思い切り、頬をつねられた。

「つたあ……」

痛みに顔をしかめて目を開けると、心底呆れた様子のレンの顔があった。

「つねるだけで済んでありがたいと思え。つーか普通あそこまで思いきり寝るか？」

「ねむかったんだよ」

「一応俺だつて男なんスけど」

「寝込み襲つたら110番して即座に警察行き。賠償金たっぷり支払ってもらうから」

「あーのーなー。俺そこまで女に飢えてねえよ」

「なら寝たつていいつしよ。さ、ご飯食べよ」

起き抜けでも食欲は変わらない。鼻をくすぐるスープの匂いに食欲がさらに刺激されている。

これ以上待たされるのは堪らないので、まだなにか言いたそうなレンを放ってスプーンをとった。

「あ、おいし」

大ぶりに切られた野菜は口の中で溶け、スープは複雑に味覚を刺激する。「適当」でこんな料理を作るレンは、料理の苦手な女の子からすると彼氏にしたくないタイプではないだろうか。

「だろ。自信作」

気を取り直して自身も食事につけたレンが自慢げに言う。しかし分量がいつもいつも適当で、同じ材料で作った「自信作」でも違う代物になるという面白い特技を持つ。同じものは二度と食べられない。

「グラタンもおいしー。うわー幸せ……」

「やつすい幸せだな」

「黙れ。いいじゃん、食事は最も身近な娯楽なんだよ」

「そうなのか？」

「そんな気がする」

なんだそれ、と笑うレンは、無邪気な子供みたいだった。多分他の女の子には見せない顔。「悪友」のポジションで、尚且つこっぴどくて軽口を叩き合うからこその特権だ。

ちよっただけ優越感に浸りながら、食事を続けた。

「ごちそうさま」

「いえいえ。美味かつたろ」

「うん美味しかった。あとで作り方教えて」

「大体でいいんならな」

「ありがとう」

自分の分の食器を持って流し台に向かう。続いてレンも食器を持ってきた。流し台の周りは綺麗で、使い終わった鍋やはきちんと片付けてある。つくづく手の回る男だ。

洗剤で食器を洗い、水ですすぎ、ふきんで拭く。レンはそれを見るたびに食器洗い機でも買えばいいのに、なんて言うが、そんな贅沢をしようとは思わない。元より一人分ないし二人分しか洗わないのだから。

「いつまでいるの」

「うわ、食い終わった途端それかよ」

「だってもう遅いし」

「いざとなればタクシーで帰ればいいだろが」

「金の無駄」

「じゃあ泊めろよ」

「あらぬ誤解を受けるからやだ」

「別になんもしないっての」

「したら金輪際アンタを友人とは呼ばない」

「だからしないって。いーだろうが、初めてって訳でもねーんだし」

不本意ながら何度かレンをこの部屋に泊めたことはある。何を好き好んで自分の家より格段に狭いこの部屋に泊まりたがるのかは理解できないが、「悪友」なのだからとさして深く考えずに泊めた。一応釘はさしておいたが。

しかし今日は少し事情が違う。含みは無いといえど、バレンタインの日にそういうことをしてどこからかそれが漏れてしまえば、周りの憶測はほぼ確定へと向かうだろう。「わたしとレンが付き合っている」と。

レンの恋人志願者から余計な恨みを買いたくはないのでそれは出来れば避けたい。

「って、レン！」

気付けば、ソファに寝転んで幸せそうに寝ている。お前はのび太

くんか、と半ば呆れ、面倒なので起こすのもやめた。

ちなみにソファはレンがいつだかに突然プレゼントしてきたものだ。レンが泊まる時にはベッドに早変わりするほど大きい。

風邪を引くといけないので毛布を引つ張り出して上に被せ、整った顔を少し眺めて落書きをするか真剣に考えた。

バレンタインだからって何が変わるわけでもない。

恋愛感情なんて持ってないから甘い夜なんて過ごすはずも無い。だけどもあ、せっかくだからゆっくり寝かせてやるか。

こんな無防備な寝顔が見れるのも、やっぱり「悪友」の特権なのだし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6611y/>

日常のヒトコマ

2011年11月21日11時21分発行